主 題：教会の建て方5

聖書箇所：エペソ人への手紙 4章13節

到着すべき目標地点を持つということは、私たちが旅をする上で非常に重要なことです。到達すべき場所をしっかりと持っていなければ、最終到着地点がなければ私たちはどこにも行くことが出来ません。たとえ、もし私たちが「今回は気の向くままに旅行しましょう」と、そのように言って目的地を定めずに旅をしたとしても、実は、私たちは最終到達地点を持っているのです。それはどこだと思いますか？皆さんのご自宅です。最終的に到達する地点がないまま、気の向くままに旅をしましょうと言って出て行くなれば、二度と戻って来ることはありません。私たちはただその分からない場所をさまよいつけることしかできないのです。目標とするべき到達するべき場所があるがゆえに、私たちはそこへ向かって旅を続けるのです。もし、それがなければ私たちはたださまようだけなのです。

キリストは教会のために用意された地図に最終到達地点として、しっかりとピンを刺してくれました。あなたがたはここにたどり着くべきなのだ。主がご自身の教会をお建てになり始めたときに、キリストはこの場所にこの教会が来るようにとその最終的な地点を示してくださっているのです。そうすることによって教会がさまよいつけることがないように。そして、教会はその目標に向かって、その目標地点に向かって一生懸命足を進めています。必ず、そこへ到達するその日に向かって一步一步旅路を歩んでいるのです。いつの日か必ず、キリストが「わたしが建てる」と言われたキリストの教会は完成の時を迎えます。イエス・キリストが備えられたこの壮大なイエス・キリストの教会という建築プロジェクトは、いつか必ずその目的とする最終到達地点へと到着することが約束されています。そして、私たちはその到達地点がいったいどこなのかということをお前回からごいっしょに学び始めたのです。そのことがエペソ人への手紙4章13節に記されています。

私たちがこのイエス・キリストが教会に与えられている教会の設計図というのを見て行くに当たって、エペソ人への手紙4章は非常に重要な箇所でした。ここには教会をどのように建てて行くのか、その設計図が記されていました。11節にはキリストがこの教会に賜物を持ったリーダーたちをギフトとしてお与えになったことが記されていました。そして、その賜物を持ったリーダーたちは一つの目的を成し遂げるためにキリストがお与えになったことが12節に記されていました。それは「聖徒たちを整える」働きでした。その働きをすることによって、聖徒たち、すべてのクリスチャンが奉仕の働きをし、キリストの教会が建て上げられて行くことを見ました。そして、パウロはその後に私たちに対して、このように賜物を持ったリーダーたちを与えた最終的な結果がいったい何なのかを教えようとしたのです。そのことは皆さんと先週から見始めた13節に記されています。

私たちはエペソ人への手紙4章11節から16節に記されている「教会の設計図」、教会をどのように建てて行くのかということを見ている、そのメッセージの中の一つにいます。今朝、私たちはその学びを続けて行こうと思います。13節に記されている教会が最終的に到達すべきその場所、その目的が何なのか、目標が何なのかをこれから皆さんとごいっしょに見て行きます。それによって、イエス・キリストの教会を建てるに当たって、私たちがどのようにして建てて行かなければいけないのかを学んで行きましょう。この浜寺聖書教会が神の設計図に沿った教会として建て上げられるために、私たちはそのことをしっかりと理解したいと思います。そして、まさにその設計図に沿って、設計図をもって、私たちがしっかりと教会を建てて行くことができるようにと願います。もう一度、11-16節を読みます。

「:11 こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。:12 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、:13 ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。:14 それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、:15 むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。:16 キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。」

☆教会の最終到達地点

私たちは今日、13節に目を向けて行きます。この13節に書かれている教会が到着すべきその到達点、それを理解するために私たちはこの節に四つの質問をするということをお前回話しました。そのうち

の二つを先週見ました。

1. だれがそこに達するのか？

この最初の質問の答えは「**私たちがみな**」ということでした。本当に救われているクリスチャンたちはすべて例外なく、必ず、この神が定められた最終的に到達すべき場所へと達するのだとパウロは教えたのです。

2. どのようにしてそこに達するのか？

二番目に私たちはこの質問を考えました。そこでパウロは私たちに一つの動詞を使ってその行程を教えてくださいました。それは私たちがそこに「到着する、たどり着く」ことです。13節の最後に「**達するためです。**」と書かれています。この「**達する**」という動詞は、実際にだれかがどこかの町に旅をして「そこに到着する」という意味で使われる単語でした。このことばを使うことによってパウロは私たちに、私たちクリスチャンの生涯は実に「**信仰の旅路**」であるということを教えたのです。それに加えて、この文脈の中でパウロが頻繁に使う「**子どもから大人へと成長して行く**」その姿をもって、パウロは私たちがその旅路において、決して、停滞したり後退したりすることがなく、必ず、一步一步目標へと足を進めて旅をする者であることを教えました。子どもたちが大人へと段々と成長して行くように、その成長は時に著しく一夜にして大きく変化を現わすものもあれば、いやむしろその殆どは、毎日毎日では全く気付くことのないような成長かもしれません。けれども、必ず、子どもは日々成長しています。ある状態で留まり続けるなら、そこには問題があるのです。いやむしろ、後退して行くならそこには大きな問題を見ることが出来ます。それと同じように、信仰者は必ず、信仰の歩みを目的地点に向かって一步一步確実に前進していなければおかしいということを、パウロは私たちに教えたのです。そして必ず、そのようにして信仰の旅路を一步一步続けながら、本当に救われているなら、私たちは間違いなく最終的に到達すべき場所へたどり着くと、パウロはその様に教えたのです。

今日、皆さんといっしょに三番目と四番目の質問を、この13節に投げかけて行きたいと思います。

3. 最終到達地点とは何か？

では、私たちはいったいどこへ行くのでしょうか？この質問は何よりも大事な質問です。目的が分からなければ、目標とする場所が見えなかったら、私たちはさまようだけです。でも、パウロは私たちにその目的の場所、目標とする場所をしっかりと示してくれているのです。いったい、そこはどこでそれは何なのでしょう？13節にそのことが記されていました。パウロはそのことを三つの事柄を通して私たちに教えてくれています。この最終到達地点に到着したときに、私たちはこの三つの事柄を確実に得ているのだと言うのです。そして、この三つの事柄を得ることこそが、まさにすべての真に救われている者たちが目指す場所であり、それこそが教会が完成したときに見ることが出来る姿だと言うのです。そして、そのためにキリストは教会にリーダーたちを賜物としてお与えになったと言うのです。

三つの事柄とは何でしょう？

- 1) 信仰の一致
- 2) 神の御子に関する知識の一致
- 3) 完全におとなになるということ

ですから、先ず、これらの三つを注意深く見て行きたいと思います。いったい何がゴール、目標地点なのでしょう？

1) 信仰の一致

一番目にパウロが言ったこと、それは私たちが「**信仰の一致**」を得ること、それに達することです。私たちがこの新改訳聖書を見るときにそのことははっきりと分かりませんが、原文を見たときに、ここでははっきりと記されているのは、この「**信仰**」ということばに付けられている定冠詞です。それはいったいどのような意味を持っているのでしょうか？私たちが普通に「**信仰**」ということばを聞いてそこで考えることは、私たちがもっているその信仰のことだと思います。つまり、私が信じていること、私たちが信じる行為、そのことを指していると考えます。しかし、実は、定冠詞が付けられて「**信仰**」ということばが使われるときに、聖書は多くの場合にそれが個人の信仰のことではなくて、私たちが信じなければならない信仰の中身、つまり、真理、もしくは教理に関することです。パウロがここで言っていることも例外ではありません。パウロが言うことは「**私たちは同じ信じ方をしましょう**」ということではなく、「**私たちは教理において一致をしなければならない**」ということなのです。

そして、パウロがここで言う教理とは、まさに私たちが信じるべきキリスト教の根幹を支える真理です。パウロはこのことを実は5節でも言っています。「**主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。**」と。これは私たちがみな同じ信じ方をするというのではなく、「**同じことを信じている**」ということなのです。信仰の内容、中身、すなわち、教理、真理です。このように私たちが今「**信仰の一致に達するように**」

と言って「教理」のことを話したのですが、そこで言われていることは、あらゆるすべての教理というよりも、むしろ、キリスト教をキリスト教とするもの、これを妥協してはキリスト教にならないとされる、そのような根幹的な真理です。つまり、たとえて言うなら、「聖書の権威」、「神は三位一体である」、また、神が明確に示しておられる様々な属性、イエス・キリストが神であること、救いは神の恵みのゆえに信仰によってキリストのみわざが為されそれゆえに与えられたものである、私たちの救いは私たちの行ないや様々な人間的な事柄によって得ることが出来るものではなく、私たちの信仰が私たちを救うものであるなど…。これを妥協してはクリスチャンでなくなるというものです。

「教理」と言っても様々な教理があります。時に、私たちはその様々な教理に対して、それは違うのではないかと別の違う見解を持つことがあります。例えば、反キリストとはだれでしょう？いろいろな考えを持っておられる方々があります。再臨はいついつ起こるのでしょうか？いろいろな考えがあります。でも、その立場が違っていても、私たちがクリスチャンであるという根幹は揺るがされないと思いませんか？パウロが言っていることは間違いなく、私たちがキリスト教を作り出す根幹的な真理における完全な一致です。究極的、最終的には、私たちはみことばを完全に理解することができるように神によって変えられるかもしれません。すべての知識を得ることができるかもしれません。そうして、あらゆる部分において一致することが出来るかもしれませんが、少なくとも、ここでパウロが言わんとしていることは、私たちの信仰を築かせるその土台となる根幹的な真理です。それにおいて私たちは一致に達するのです。

教会のリーダーたちが教会に集う真のクリスチャンたちを、みことばを正しく教えることを通して整えて行くときに、このことは間違いなく起こります。みことばが正しく教えられて行くなら、そこには必ず、信仰の一致、教理における根幹的な教理の一致が起こって来ます。なぜなら、神の真理は一つだからです。それゆえに、その真理が正しく理解されるなら、みな一つ一つの理解を得て、信仰の一致に到達するのです。別の言い方をすれば、もし、教会に様々な混乱や分裂が起こっているとすれば、その教会がいかに神の真理から離れた所にあるのかを告げているのです。みことばを正しく理解して、みなキリスト教の根幹的な教えにしっかりと立つならば、そこには必ず一致が生まれて来るはずで、もし、一致がないとするなら、その原因として上げられることは、人々がみことばの真理から離れ、その教会がみことばに沿っていないということです。

神の真理は人々の心を繋げるものです。神の命令は教会にとって導きの手です。神の真理は一人ひとりのクリスチャンの心を繋ぐ接着剤です。教会は神の真理に沿って物事を考え、その真理に沿って行動を取って行くようになるのです。皆さん、このように言うとひょっとして疑問に思われるかもしれませんが、なぜ、パウロがこんな当たり前のことを語るのか？先ほど言ったようにキリスト教をキリスト教とする真理のこと、それにおいて一致するのは当然のことだと思いませんか？そこが崩れていたらおかしいと思うでしょう。けれども、もし、皆さんがその様に思っておられるなら、皆さんは人間の墮落ということ、人間の罪というものを十分に理解していないからかもしれません。

パウロはこのことがよく分かっていました。パウロは自分が牧した教会、18ヶ月もそこに滞在して自らが教会を築き、そこに居る人たちみなを教え、弟子として訓練して来たその教会で、まさにこのことが起こっていたのを目の当たりにしていたのです。それはコリントの教会です。パウロは一生懸命、熱心な働きをもって人々を導こうと努力し、そこに滞在して朝から晩まで汗を流し、ときに涙を流し、熱心にみことばを伝え教えていたその教会ですが、そこには問題があったのです。分裂があったのです。教会は一致していなかったのです。その原因について、パウロはコリント人への手紙第一3章に言及しています。3：1-3「さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。：2 私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。：3 あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているのではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるのではありませんか。」

皆さん起こっている問題が見えますか？教会に様々な分裂があったのはなぜでしょう？それは人々がみことばの真理に対して余りにも未熟な理解しかできていないからです。パウロは教会の人たちがみな救われていなかったとは思っていません。だから、彼らを一生懸命励まし、彼らが成長するように教えをしているのです。ただ問題は、彼らが真理を理解していたとしても、余りにもその理解において幼すぎるゆえに、未熟であるゆえに分裂が起こっていたことです。その幼さが分裂に形をもってはっきりと現われていたのです。その分裂からどのようにして立ち直ることが出来るのでしょうか？パウロはその答えもこの手紙の中にはっきり記しています。1：10をご覧ください。「さて、兄弟たち。私は、私たちの主イエス・キリストの御名によって、あなたがたにお願いします。どうか、みな一致して、仲間割れすることな

く、同じ心、同じ判断を完全に保ってください。」、つまり、一致をもつためには、分裂の問題を解決するためにはみなが同じ理解へと到達し、みなが同じ考え方を持って、みなが同じ真理を語ることなのです。皆さんご自身の経験からもよくご存じだろうと思います。私たち人間は時に神のみことば以上に私たちが持っている伝統や、現在の流行に目を向けることがあります。そして、神のみことば以上にそれらを大事にすることがあります。皆さんご存じですか？クリスチャンの中には、時に、神の命令を余り真剣に捉えない人たちがいます。このような人たちにとって神の栄光というのは彼らが生きて行く上で最重要事項ではありません。頻繁に不従順が起こらない限り、たまに起こる不従順は大目に見てくれるだろうと考えます。彼らは自分たちの不従順、自分たちが神のみことばに沿わない生き方をしていることに対して、様々な理由をつけてそれを正当化しようとします。自分たちの偽りや自分たちの怠惰、怒り、自分自身に対する自己憐憫やそれら以外のあらゆる事柄が、今回は神に赦されるものだ、受け入れられるものだとしていろいろな言い訳をするのです。

そのようなことはありませんか？そのような人を目にしませんか？皆さん、私たちは真理を知らなければいけません。そして、その真理に沿って生きなければいけません。私たちは確かに、信仰の根幹を支えるキリスト教をキリスト教とする真理をしっかりと分かって、そこに一致していますと言うかもしれませんが、皆さんが本当にそうおっしゃるのなら、皆さんは全能である神の前にどうして「神は私の問題を解決することができない」と言って嘆くのですか？神が主権者であり愛の方であり、私たちに常に最善を為してくださいとみことばが教えているにもかかわらず、「神の最善は私の最善ではない」と言って嘆くのですか？皆さんはどうして、神が全知の方であると告白しながら「私の心の中にある罪はだれにも分からない」と言って、その罪を心の中で喜んでいるのですか？皆さん、本当に一致しておられますか？私たちが教理において一致するという事は、単に「その教理を知っています」と告白することではないのです。私たちが同じことを考え、同じ思いをもち、同じ真理を告白し、同じ生き方をして行くようになって初めて、私たちはその一致に到達するのではないのですか？もし、私たちが神を知っていると言いながら、キリスト教の根幹を形成する教理に対して「確かに同意する」と言いながら、みことばが命じる一つ一つの命令に対して、妥協しながら歩んで行こうとするならば、皆さんは決して一致を保っておられません。

パウロは言うのです。信仰の旅路を続けて行くときに私たちが必ず到達するところがある。真のクリスチャンはみなそこに向かって進んでいるし、必ず、そこに到達する日がやって来る。そこには「信仰の一致」が待っています。みなが確実にそのことを信じ、それを告白するだけでなく、そのような事実に基づいて生きるように、私たちは気をつけなければいけません。そのように生きているかどうかをしっかりと吟味しなければいけません。口先だけで告白することはいくらでも出来ます。でも、神は皆さんの心を吟味され皆さんの生き方を吟味します。信仰の一致、私たちが到達すべき場所、私たちが最後に連れて行かれる場所です。

2) 神の御子に関する知識の一致

別の言い方をすると、これは「イエス・キリストに対する献身の一致」と言えます。「愛の一致」と言ってもいいかもしれませんが、パウロはここで単に知識の話をしている訳ではありません。パウロがここで使っていることばを見ると、非常に深い正確な理解に基づいた個人的な関係のことを話していることが分かります。このことばはイエスが「父がわたしのことを知っている」ということをお伝えになったときに使ったことばです。マタイ 11:27 **「すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています。それで、父のほかには、子を知る者がなく、子と、子が父を知らせようと心に定めた人のほかは、だれも父を知る者がありません。」**、神は御子イエスのことを単に頭の中で「そう言えば、そういう人がいるなあ」という知識をもっていたわけではありません。明らかに正確で、正しい完全な情報をもって、その人物、御子を確実に個人的に親しい交わりを通して知っていました。それが私たちが達成する時に知識の一致においてもたらされるものなのです。

ちょうど、御父が御子を知っていたように、私たち信徒たちは御子イエス・キリストを知ることによって、一致し、個人的な親しい交わりが出来ます。それが神の設計図に沿って教会が建てられて行くときに、教会が到達する場所なのです。パウロにとってこのキリストを知るということは、まさに、彼のすべての情熱を捧げた事柄でした。前回、私たちはピリピ人への手紙 3章を参照しましたが、3:8にはこのように記されています。**「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損とと思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあきたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、」**、これはパウロが、キリストを知る前、クリスチャンになる前に私は様々な誇るべきものをもっていましたが、それらをキリストを知ることと比較するなら、私にとってこのような人間的な誇りとなる様々な事柄はゴミのようなものだと言っているのです。

その告白です。新改訳聖書は「キリスト・イエスを知っていることのすばらしさ」と訳していますが、原文を見ると、パウロがここで言わんとしていることは、「キリストを知る」ということです。キリストを知ることがいかにすばらしいかということなのです。

そして、パウロはそれを知っていたゆえに、自分自身のすべてを捧げて一心にこの一事だけに励んだと言っているではありませんか。「イエス・キリストを完全に知り、死者からの復活にあずかりたい、キリストに似た者になりたい」と。そして、それは単に、イエス・キリストに関する教理を正確に知っているということではないのです。皆さん、このエペソ4：13に書かれている「**信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し**」という表現は分らなくはありませんが、原文を見ると、ここで言われている「**信仰の一致と…知識の一致**」はコインの表裏のようなものです。いっしょに動かなければいけないのです。いっしょに働きいっしょに到達するものなのです。パウロが言わんとしていることは、私たちは確かに真理を知って行き、一致をもって行く、信仰の一致、教理において一致するが、同時に、それは私たちがイエス・キリストを個人的に知って行くことにおいても一致して行くものだということなのです。

もう少し分かりやすく言うと、皆さんが確かにだれかと関係を持つとして、皆さんはその人に関して何らかの知識を持っています。だれかをよく知っているからその人と個人的関係をもつし、よく知らなかったとしても、個人的な関係が芽生えて行くときは何らかの知識がそこに存在します。それゆえに、個人的関係があると必ず知識はあります。でも、知識だけあってそれによって個人的関係がそこに存在すると言えますか？たとえば、皆さんの大好きな芸能人、スポーツ選手などだれでも構いません。皆さんがテレビでよく見かけてよく知っている人たち、特に大好きな人たちのことは皆さんよくご存じです。その人たちの誕生日や、何が好きでどんな学校に通いどんな職業に就きどの番組に出演し、どんなスポーツシーンで活躍し、どんな成績を残し、どんな歌を歌いと、よく知っていますね。血液型が何か、どんな色が好きか、いつどこにいるのかまでも皆さんは知っているかもしれません。だからと言って、皆さんはその人と個人的な関係を持っていますか？持っていません。二つは違うのです。パウロが言っていることは、あなたがたは「それらの事柄を知っている」ではなくて、「あなたは個人的に知っていますか？」ということなのです。

キリスト教とは、単に教理を信じているからクリスチャンであるということではありません。キリスト教とは、イエス・キリストとの個人的な関係によってもたらされるものです。イエス・キリストとの個人的関係は、単にイエス・キリストについて知っているということではなくて、私たちがこのキリストと明確な個人的な関係を持っているところに現われるのです。皆さんは、イエスのことを大好きだと思えます。皆さんはイエスについていろいろなことをご存じかもしれません。けれども、もし、皆さんがイエス・キリストのことを心から愛し、心から慕い、イエス・キリストに心から従って行く歩みをしていないとするなら、皆さんにはイエス・キリストとの個人的な関係は存在していないかもしれません。皆さんは、自分で出来る限りイエス・キリストの知識を蓄えることが出来るでしょう。イエスを尊敬することが出来るでしょう。イエスについてのいろいろな書物を読み、イエスが私の目標ですと言うことも出来ます。また、ひょっとするとイエスのポスターを部屋に掲げることが出来るかもしれません。イエスについて知り得る限りのことをすべて暗記して、毎日の生活をイエスのようにと言いながら、歩むことが出来るかもしれません。

でも、もしそこに個人的な関係がなければ、終わりの日に、イエスが皆さんに向かって何と言われるか知っていますか？「わたしはあなたを知らない」です。皆さん想像出来ますね。先ほど話したように、皆さんの頭の中で思い浮かべることができる、皆さんが知っていると思っている人、皆さんが大好きな有名人、その人のところに皆さんが出て行って手を出して「いやぁー久しぶりです」と挨拶したとき、その人は何と言いますか？「どちらさまですか？あなたはだれですか？」。何よりもクリスチャンにとって悲劇的なことは、イエス・キリストを知っていると言いながらそれが単なる知識の集まりでしかなく、個人的な関係がないゆえに、いつの日か主の前に立った時に、「待ちに待っていたのです！」と言ってイエスを抱きかかえようとしても、イエスが皆さんの前に手を出されて「止めてください。わたしはあなたのことを知りません」と言われることだと思いませんか？パウロは言います。「私たちは知識の一致に到達する」と、それは私たちみなと同じように「イエス・キリストを個人的に知ることが出来るようになる」ということです。私たちみなと同じ個人的な親しい交わりをもって、イエス・キリストの前に立つことが出来ると言うのです。私たちの教会が目指すことは「そういう者になって行くことである」とパウロは言ったのです。

イエスはこのようなことをおっしゃっています。ヨハネ10：27「**わたしの羊はわたしの声を聞き分けま**す。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。」、皆さん、誤解しないでください。イエスは神ですから、今現在、わたしの羊以外の羊たちも全部知っています。あらゆる人たちに

対する知識を持っています。でも、イエスは言うのです。「わたしは、わたしの羊に関して非常に良い、非常に正確で親しく深い知識を持っている。よく知っている」と。個人的関係を持っているということです。そして、個人的関係を持っているその者たちは「わたしの声を聞き分ける、そして、わたしについて来ます。」。どうしてですか？どうしてこのように言えるのでしょうか？神によって知られている者たち、イエスが「わたしの羊だ」と分かってくださっている人たちは、イエスの声を良く聞き分けると言うのです。どうして分かるのでしょうか？神が私たちに伝えようとしていることはこの聖書の中に記されています。人々はこの御声に聞き従うと言います。そして、ついて行きます。イエスの羊はイエスのことをよく知っているからです。この方こそが私たちが愛して止まない、私たちが導いてくださるすばらしい羊飼いだからです。この方こそが私たちの救い主であり、この方こそが私たちの主であると分かっているからです。その声が聞こえるから、喜んで「分かりました。あなたの所に私は行きます」と言って、その声に従って行くのです。

パウロは信仰の先駆者として、キリストに立てられた使徒として、すべての信徒たちがこのキリストを個人的に深く知って行く歩みをして行くことが出来るように、その模範を示しました。ペリピ3章の文脈の中でパウロは「見ならいなさい。私のような生き方をして行きなさい」と言っています。パウロにとってキリストを知ること以上に重要なことはありませんでした。キリストを愛して止まず、キリストに献身的に生きることこそが、彼の人生にとってすべてだったのです。そして、それこそがまさに教会が目指さなければならない、いつの日か必ず教会が到達する場所なのです。一切のものを排除して、ただただキリストを愛し、キリストを称え、キリストに従って行くことが出来るそのときに、私たちはいつの日か必ず到達するのです。

御子に関する知識、皆さん、その様に献身的に今歩んで行こうとしていますか？そのような歩みを皆さんは日々歩んでおられますか？皆さんの人生の中でイエス・キリストは最も大きな焦点になっていますか？それとも他のことの方がイエスより大切ですか？皆さんが最もエネルギーを使っている場所はイエス・キリストを知ることですか？その方を個人的に知って、その方を心から愛して心から従って行くために私は何が出来るだろうと、日々問いかけながら生きていますか？それとも自分がやりたいことをすることにエネルギーを使っているのでしょうか？皆さんの生き方は目標に向かっていきますか？そこに向かって一歩一歩歩みを進めていますか？

3) 完全におとなになる

完全な人物になることが、すべてのクリスチャン、真に救われている者が必ず到達するところだとパウロは教えます。ここでパウロが使っていることばは、完璧さ、完全さ、十分に成熟しこれ以上成長の余地がないような人物を指すために使うことばです。そして、私たちが最終的にどのような人物になるのかをはっきりと現わしています。パウロが言わんとしていることは、私たちの信仰の成熟です。それが完成に至ることです。今日は見ませんが、パウロはこの文脈の中で何度もそのことを語っています。特に14節以降、パウロはこのことを子どもと大人を比較しながら話を進めて行くではないですか。パウロが見ているのはその「成熟」です。

私たちクリスチャンが持っている一つの問題点、妥協点とはこのようなものだと思います。皆さん、よく言ったり聞いたりしませんか？「私は完全ではないから罪を犯してもしょうがないではないですか。私はまだ完全な者ではないから、完成されていないから、毎日の生活の中で罪を犯すのです。」と。これは決して間違った告白ではありません。その通りです。私たちはまだ完全でないから、日々の生活の中で罪を犯します。でも、もし皆さんがこの告白を自分が罪を犯すための言い訳として使っているとすれば、皆さんは悔い改めなければいけません。なぜなら、皆さんは完全へと向かって進んでいるからです。パウロは言います。「あなたの到達すべき所は完成された人物です。完全な人物、完璧な姿だ」と。私たちは時に、クリスチャンとして成熟して行くことは、教会のリーダーたちがすればいいことで私には関係ないと思っているかもしれませんが。私は一般信徒だから別にそんなに成長しなくてもいい、これで十分ではないですか？と。もし皆さんがそのように思っているなら悔い改めなければいけません。なぜなら、教会の一人ひとり、教会に属する真のクリスチャンたちはみな、完全な大人に向かって歩みを進めているからです。それゆえに、私たちはそこへ向かって歩みを進めていかなければいけません。それゆえに、私たちはそこへ到達するために生きて行かなければいけないのです。私たちは日々成熟さを増して行かなければいけないのです。

興味深いことは、パウロはここで実は単数形のことばを使うのです。「**完全におとなになって**」と、一人の完全になった人物です。不思議なことは、パウロは主語で「**私たちがみな**」と言っているのに、ここでは「**完全におとなたち**になって」とは言わないのです。パウロが思っているのは一人の人物なのです。つまり、あらゆるクリスチャンがいつか必ず到達する場所は、みな変わりなく一人の人物としておとなにな

っている姿なのです。だれひとり漏れる人はありません。だれ一人として例外はいないのです。その過程においてもその目標と向かっている旅路においても、「私はこれ位の成熟度で十分です」という人はだれ一人いないのです。みな同じように、成熟へ向かって進んで行かなければいけないのです。

皆さん、こんなことを考えませんか？「成熟度」と聞いたときに、そこにはある程度幅があるではないですか？3歳の子どもと10歳の子どもを比べたら、明らかに10歳の子ども方が成熟しています。10歳の子どもと18歳の青年を比べたら、願わくは18歳の青年の方が成熟しているはずですが。18歳の青年と30歳の人物を比べたら、30歳の方がおとなであって当然だと思いませんか？同じように、私たちの信仰生活においてもその様な違いが生まれて来る気がします。パウロが言う成熟度とはどのようなことが基準なのでしょう？私たちが3歳になることでしょうか？私たちが10歳になることでしょうか？18歳？40歳？何歳になることでしょうか？どのような姿が完成された人物なのでしょう？パウロは言います。13節の最後に「**完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。**」とあります。パウロがここで言わんとしていることは、詳しく説明する時間がないのでひと言でまとめるなら、それは私たちがキリストに似た者となることです。キリストと同じ姿になることです。完全におとなになるとはどういうことでしょうか？私たちがキリストとそっくりになること、私たちは確かにクリスチャンどうしの会話の中で「キリストの似姿に」とか「キリストに似た者となって」と言いますが、問題は、私たちがその定義をしっかりと分かっているかどうかです。その正しい定義に基づいてこのことばを使うかどうかです。私たちはよくこのようなクリスチャン用語をしっかりと理解しないまま、雰囲気だけで会話することがあるのです。そのようなことがないようにしなければいけません。

「キリストに似た者となる」とはどういうことなのでしょう？間違いなく違うことは、私たちが神になるということです。私たちは神になりません。キリストに似た者となるということは、私たちが神のようになって、神の属性をもつことでしょうか？そうではありません。私たちは全知全能にはならないし、遍在でもありません。私たちは神にはならないのです。キリストに似た者となるということは、私たちが神になることではありません。では、いったいどのようなことで似るのでしょうか？それはイエス・キリストがこの地上においてしっかりと示された、イエスご自身もっておられた道徳的な特徴、神が人間に対しても持つことが出来るようにしておられる神の特徴、私たちがそれらを身につけて、キリストがこの地上で生きられた模範に完璧になぞって生涯を送ることです。

ヨハネはこのことをその手紙の中でこのように告げました。Iヨハネ2：6「**神のうちにとどまっていると**言う者は、**自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。**」と。このような生き方をすることこそが、私たちが目指して行かなければいけない道、日々成長して行かなければいけない道なのです。この地上において、イエスはお自身もっておられた神としての属性を用いることを拒みました。神であることを捨てることはできないとは考えずに、人の姿を取られたのです。この地上においてイエスは人間として生活されました。イエスは父である神のみこころに100%完全に服従し生きられました。神はそのように生きることが出来るように、そのように明確にしっかりと正しく歩んで行くことが出来るように、イエス・キリストに対して、聖霊を助け手としてお与えになり、その歩みを全うされました。そして、イエス・キリストは罪を犯すことなく完全に神のみこころに従って、神の栄光をこの地上で現わしながら生きたのです。キリストに似た者となるとはそういうことです。

私たちが救われた者として神の家族に受け入れられたゆえに、私たちはイエス・キリストが御子として父のみこころに完全に服従したように、私たちも御父のみこころに完全に服従し、その願い通りに生き、聖霊の助けを受けて、私たちが主に喜ばれる生き方を確実にして行くことです。それを通して神の栄光を現わすことです。もう少し具体的に言うなら、キリストに似た者となるということは、私たちが自分自身の持っていた古い自分の罪深さ、罪に満ちた態度やその行為を脱ぎ捨てて、キリストに似たその新しい人を身に付けて行くことです。そのことをパウロはこのエペソ人への手紙4章の後半部分で私たちにしっかりと教えています。別の言い方をすると、それは私たちが肉の欲望を取り除いてそれを豊かに示しながら生きるのではなくて、御霊に満たされて御霊によって歩むゆえに、御霊の実を豊かに実らせながら、この人生を歩んで行くことです。そうすることによって私たちはキリストに似た者となる事が出来るのです。

「完全になる」、それは決してどうでもよい命令ではありません。むしろ、これは神が実に私たちに定めておられる計画なのです。皆さん覚えておられますか？ローマ人への手紙8：29「**なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。**」。神は永遠の初めから、私たちが救われることを選んでおられ、その時にもうすでに私たちがキリストの姿になるように定めておられる、だから、私たちは必ずそこに到達するのです。だから、私たちは信仰の旅路を歩んで行く上で、その姿に似た者へ段々と変えら

れて行くのです。まさにそのことはパウロ自身が生きて来た生き方でした。パウロが人々の前に働きを為したその目的はまさにここにあったのです。コロサイ 1 : 2 8 **「私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。」**、ここでも同じことを言います、パウロの働きの目的は**「すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。」**。この旅路に近道はありません。瞬間的に完全な者に変えられることはありません。この旅路は続くのです。私たちは一步一步その旅路を続けていかなければいけないのです。

いったい、どのようにして罪深い私たちがこのようにキリストに似た者へと変わって行くことが出来るのでしょうか？そのことをパウロは私たちに一つの短いことばで教えてくれています。Ⅱコリント 3 : 1 8 **「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」**、皆さん気づきませんか？パウロはここでも**「私たちはみな、」**と言っています。真に救われた者たちはみなこのようになって行くのです。どのように私たちは主に似た者となるのでしょうか？神の栄光を正しく完全にイエスが現わしたように現わして生きて行くことが出来るように変わって行くのでしょうか？パウロは言います。**「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、」**、この部分には皆さんの聖書には注*が付いています。欄外を見るとそこにはこのように書かれています。**「主の栄光を鏡に映すように見ながら」と**。私はこちらの方が正しい訳だと思います。パウロが言わんとしていることはこういうことです。当時の鏡は金属を磨いたもので、今の鏡のように完全にはっきりとその姿を映すものではありません。でも、ボンヤリとでもその姿が映ったのです。なぜ鏡が重要なのかというと、私たちが鏡を見るときは必ず目の前に何もさえぎるものはありません。パウロはそのことを強調しているのです。今の時代の鏡を想像しないでください。金属のお盆に映っている自分の姿を考えてください。その様にぼんやりとしているけれど、何のさえぎるものなく見ているのです。どのようにしてそれを見るのでしょうか？神のみことばがそれを表わします。神の栄光がどれ程のものなのか、神がどんな方なのかをこの聖書が皆さんに伝えていませんか？私たちは神の栄光を知っている訳ではありませんが、ぼんやりとでもあってもはっきりと目の前にその栄光を見ながら、さえぎるものなく私たちは神の栄光を知ることができるのです。他にどのような方法がありますか？私たちの信仰の先輩たちがいます。彼らがどのように成熟さを増してキリストに似た者として成長しながら歩んだのか、私たちはその姿を見ることが出来ます。

でも、そのようにして私たちは神がどのようなお方なのかを一つ一つ少しずつ知りながら、栄光から栄光へと、成熟から成熟へと変えられて行くのです。なぜ、そのように保証できますか？そこには「聖霊の働き」があるからです。皆さん成熟しておられますか？みなさんおとなになっていますか？皆さんは栄光から栄光へと主と同じ姿に変わって行っていますか？問題はそこです。神が私たちに求める教会の姿は、神が与えてくださった教会のリーダーたちが神のみことばを正確に人々に伝えることを通して、彼らが神の栄光を確かに見て、整えられて、一人ひとりが喜びのうちに自分の賜物を用いて仕え合い、助け合い、教え合い、励まし合い、戒め合い、教会のからだを建て上げて行くことです。そのときに現われるのは、キリストの満ち満ちた身たけにまで達して行く成熟したクリスチャンの集まりなのです。

最後の質問を簡単にまとめて終わらしましょう。

4. 私たちはいつ最終到達地点に達するのか

いったい、いつ私たちはそこに到達するのでしょうか？皆さんはもうその答えは分かっているでしょう。いつ私たちは完全な者になるのでしょうか？いつ私たちは、完璧に信仰の一致を持ち、キリストの知識に関する一致を持ち、いつ完全なおとなになるのでしょうか？その時のことをヨハネはこのように言います。**「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」** (Iヨハネ 3 : 2)、イエスが来られるその日、その日に教会は完成するのです。その日に私たちは最終到着地点に到着するのです。

皆さん、このエペソ 4 : 1 3 の最初に書かれていることばは何ですか？**「ついに、」**とあります。このことばは「～まで」ということばです。ここでパウロが言わんとしていることは、神、イエス・キリストがこの教会を建てるに当たって与えた設計図はいつまで続くのかということです。いつまで有効かということです。文脈をよく見てください。キリストは教会に賜物である使徒たちを与えて、その人たちが聖徒を整える働きをし、聖徒一人ひとりが奉仕の働きを為して教会が建て上がって行きます。それはいつまでですか？信仰の一致がもたらされ、知識の一致がもたらされ、完全におとなに達するまでです。キリストが教会を建て始めてから 2000 年経ちました。それゆえに、私たちは設計図を変えるべきだ

と思いますか？今の時代は昔よりも変わって来ています。いろいろなことが大きく変化しました。今の時代に合わせて、今の人々の必要に合わせて、私たちは違う設計図で教会を建てるべきでしょうか？違いますね！「わたしがやってくるその日まで、この設計図に沿ってあなたがたは教会を建てなさい。」、これが正解です。だから、私たちはみことばを宣べ伝えます。だから、私たちはこの時間が他のどの時間よりも大切な時間だと思っているのです。だから、私たちはその時間を通して、一人ひとりがみことばを通して、キリストによって整えられ、賜物を生かして働こうと促され、主に仕える者へと変わって行くことを心から願って日々の生活を歩むようになって行くことと確信しています。

計画はもうすでに備えられています。土台はすでに据えられました。建物はもうすでに建て始められているのです。どのようにして完成されますか？それは私たちに託されています。願わくは、浜寺聖書教会が、皆さんが通っておられるその教会が、神のみこころに沿った教会となり、一步一步、私たち一人ひとりが信仰の歩みを、信仰の旅路を進み続けることが出来るように、神に期待し、そのように願って生きて行こうではありませんか！